Web コラボレーションツールと MBA 教育

一橋大学大学院商学研究科　尾畑裕
hiroshi@obata.misc.hit-u.ac.jp

1. 一橋大学で導入した Web コラボレーションツール

一橋大学において、2003 年 10 月より、一橋大学の同窓会組織である（社）如水会が、一橋大学と連携して学生の IT リテラシー向上を支援するプログラム「母校学生ＩＴリテラシー向上支援事業」を立ち上げた。このプログラムは、①東西生協・西喫茶への無線 LAN 導入、②高機能コラボレーションソフト如水会 Digital Work Place の導入、③生協と連携したノートパソコンの廉価販売、の３つの柱からなっていた。ここでは、とくに、高機能コラボレーションソフト如水会 Digital Work Place（以下 DWP と略す）の導入の効果について検討する。

2. DWP の特徴

DWP は、株式会社オレガディールの製品 Alternax をベースに一橋大学用に開発された。ひとことでいえば、インターネットを介して安全に利用できるグループウェアとでもいうべきものである。具体的には以下のような特徴がある。①インターネット経由で利用できるので、大学からでも、自宅からでも、他大学からでもアクセスできる。②ベストエフォート型のインターネットメールと異なり、配信保証型であり、未読、既読も判明する。③通信路およびデータベース内部も暗号化されており、高いセキュリティを実現している。④メール機能、メーリングリスト機能、掲示板機能、ファイル交換機能を統合的に提供し、統一的な操作方法で利用できるようになっている。⑤創意工夫によりさまざまな利用法を開発できる自由度を有している。⑥参加者自身による登録と管理者による登録をサポート、管理者がユーザー権限を細かにコントロールできるなどユーザー管理の利便性が高い。⑦スレッド、ドライブ（ファイル置き場）、レポートボックスのまとまりをコミュニティとしてグループ化して管理できる。⑧キーワード検索が可能、⑨すべてのメッセージ等には、発言者のユーザーID と氏名がつくため責任ある運用がなされる。

3. 授業における DWP 利用のメリット

DWP の利用により期待される効果は以下のようなものである。①事前配布資料の効率的配信、②講義前、講義後のディスカッションの活性化、③授業中に説明しきれなかったことの補足、④グループワークなどの学生活動の可視化、④平常点の客観的評価。①についていうと、授業のときに配布資料を配るかわりに DWP のスレッドにファイルを添付しておけば、各自ダウンロードして、事前に予習してくることができる。②についていうと、授業の前と授業の後のフォローが格段にやりやすくなる。授業に先立ち、予習問題をだしておく。あらかじめテーマをかかげて、授業に先立ち DWP 上で議論してもらう。そこで出た意見を授業中にとりあげ授業中に議論する。授業が終わっても、さらに議論を続けることができる。③についていうと、授業中にいい忘れてしまったこと、授業中に間違ったことをいってしまったとき、授業がおわってから質問がきて、その質問に関連して受講生全員に補足したいときなどに便利である。④についていうと、最近グループワークを課すことがあるが、そのグループワークにおける個人ごとの貢献を把握するのに有効である。グループワークは、受講生に自発的に課題に取り組ませるのに非常に有効である。しかし、グループワークの評価上の問題は、フリーライダーの存在である。7 人から 8 人のグループがあるとすると、そこになにも貢献しないひとというのがでてくるものである。グループワークを教員も参加する DWP のスレッド上で行ってもらえば個人ごとの貢献がはっきりする。④は、平常点の評価への応用である。最近は、試験一発ではなく、

多面的な評価が求められている。しかし、平常点というのは主観的になりやすく、客観的な基準を設けにくい。その点、DWP の書き込みをもとに平常点を採点すれば、客観的な評価が可能になる。書き込み回数×書き込みの質の係数で評価するのである。

授業管理上の面だけでなく受講生の立場からみてもメリットが高い。常時オフィスアワーのような状態になり、やる気のあるひとはどんどん質問できるので、学習の効果が高まる。また、レポート提出を DWP 経由で行った場合、学生は提出物が受け取られたかどうか確認できて安心である。メールでのレポート提出だと、送ったメールが教員に届いているかどうか不安なものである。学生は提出したといい、教員は受け取っていないという水掛け論になる可能性もある。

4. MBA コース「管理会計」におけるデジタルワークプレースの利用事例

報告者は、2003 年度冬学期（2003 年 10 月～1 月）、MBA コース（一橋大学商学研究科経営学修士コース）における「管理会計」を担当した。履修者は 40 名ほどであった。

MBA コースの特徴は、社会人経験者が多いということである。MBA コースの授業では、受講者の勤務経験を授業でのディスカッションに反映させる場合が多い。そのような場合、授業に先立って予習問題のスレッドでディスカッションをしてもらうと、受講生は、自分自身の勤務経験を踏まえた意見を書き込んでくる。その意見について、別の学生が反対意見を書き込む。財務諸表分析、CVP 分析のためのディスカッションスレッド、事業部の業績測定ディスカッションスレッド、予算スラックについて議論するスレッドなどが、非常に書き込みの多かったスレッドである。これらのトピックは、勤務経験のあるものにとっては、身近なトピックである。学部から直接、MBA コースに入学してくる学生もいる。社会人経験者がアクティブに書き込んでいると、学部から直接きたひとたちには、書き込みにくい雰囲気があるようである。しかしながら、社会人経験者のアクティブな書き込みに刺激を受け、読んでいるだけでも勉強になることも多いようである。

自分自身のかつていた会社のことを書き込む場合、40 名程度のクラスのひと限定という条件でのみ可能ということも多い。その点、セキュリティのしっかりしている DWP では、そのような話題を議論するのに適したツールである。

冬休みを中心に、５つのチームを作って、グループワークを課した。ABC/ABM についての課題に取り組むグループ２つと、バランスト・スカカードについての課題に取り組むグループ 3 つである。個人の貢献を把握するため、グループ内での議論は、DWP 上で行うようにといっておいたのであるが、実際には、グループごとに、DWP の活用度に大きな差がでてしまった。一番活用したグループは、126 件のメッセージが書き込まれ、DWP が非常に効果的に利用された。このグループには、自分で会社を経営しているひとがいて、その会社のバランスト・スカカードの作成に取り組んでいた。グループ内で、自由に意見を交換しあい、グループ内で十分に意見をぶつけあって最終報告をまとめており、グループワークの成果も非常に高品質のものであった。

5. まとめ

DWP の利用は、授業スタイルの変化をもたらす。DWP の利用は、授業中だけで完結しない、履修者参加型授業へと変化させる。教師にとっては、四六時中、学生からの質問にこたえる態勢を維持するのは、かなりたいへんなことである。しかし、いったん軌道に乗れば、学生同士で、DWP 上で議論をしてくれる。授業時間をこえて、受講者が参加できる環境は、MBA 教育にはきわめて意義深い。DWP のようなツールは、基本的なインフラとして、多くの授業で利用されればされるほど、その相互作用は大きくなり、学生にとっても、教員にとってもメリットも大きいものになろう。